

三重県鈴鹿市

# 伊勢国分寺跡

- 第2次発掘調査概要 -

1990.3

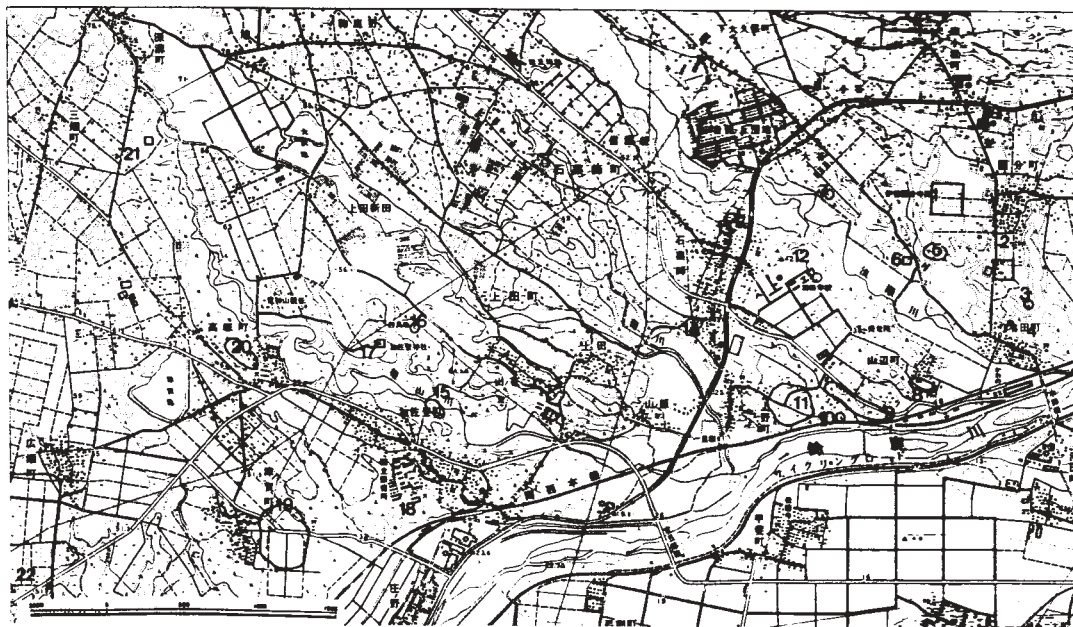
鈴鹿市教育委員会

# はじめに

伊勢国分寺跡は国分町集落の西方に位置し、古くから広範囲に散布する古瓦や「堂跡」という字名からその所在地はよく知られていた。当遺跡は、史跡名勝天然記念物保存法が制定された3年後の1922（大正11）年に、約37,000㎡について国史跡に指定されたが、これまで正式な考古学的調査は実施されたことがなく、寺域や伽藍配置が不明のまま今日に至っている。

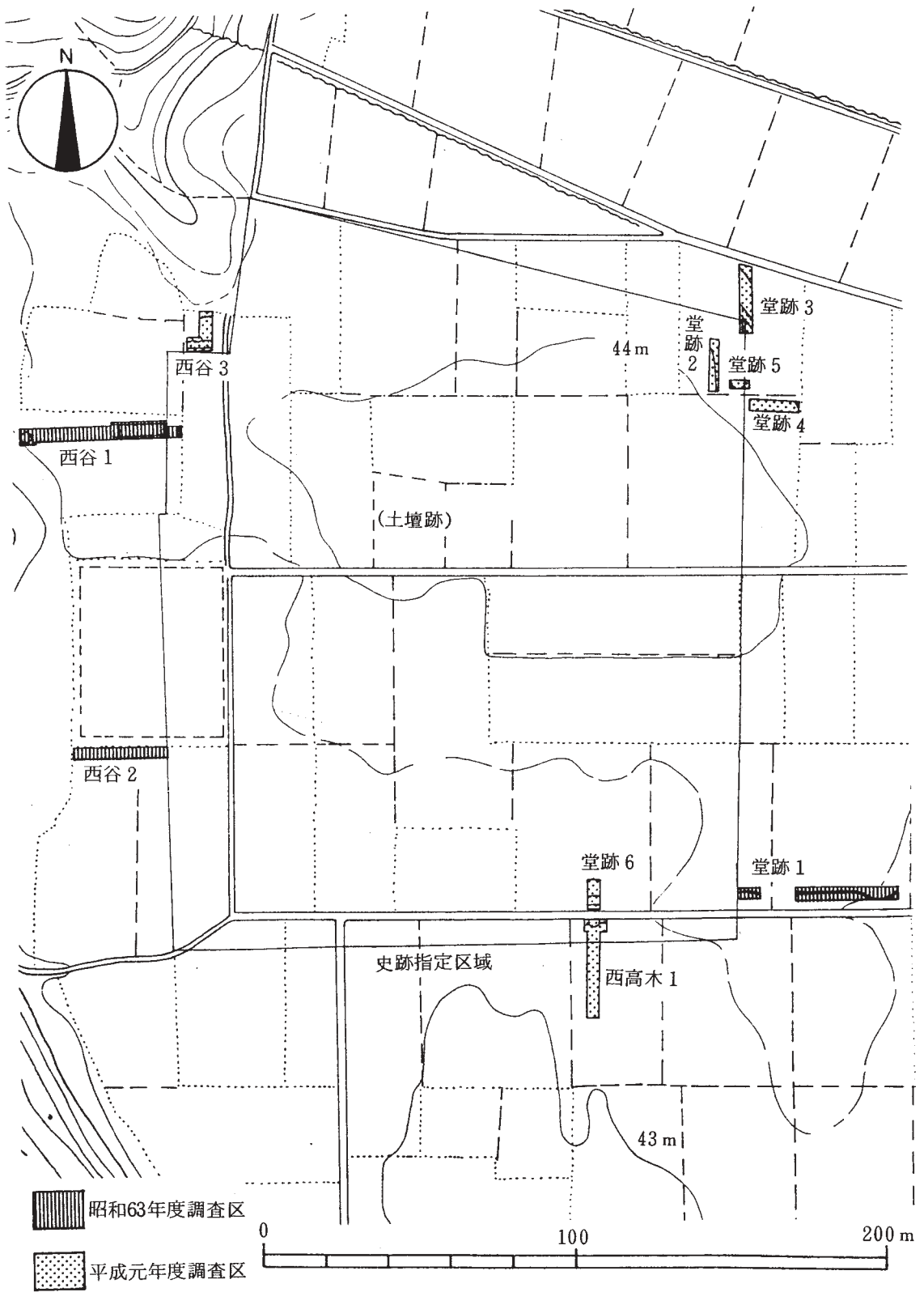
史跡周辺は農用地の指定を受け大きな開発は阻止されつつも、畑地から水田への地目変更や北勢バイパスに代表される道路建設並びに不燃物処理施設建設等の大規模開発により史跡を取り巻く環境は決して良い状況とは言えない。こうしたことから保存管理計画を策定して将来にわたり名実共に市を代表する史跡として保存を進めるため、文化庁や県教育委員会の指導と助言を得ながらようやく寺域確認調査に着手した次第である。

寺域確認調査は、昭和63年度より開始し、本年度は2年目にあたる。昨年度は史跡範囲外に3箇所のトレンチを設定して調査したが、その1箇所からは寺の西の境を区切る築地塀跡の痕跡や大型の掘立柱建物、国分寺造営に関連したとみられる竪穴住居が検出されるなど大きな成果が得られた。本年度は寺域のコーナーと南限を明らかにするため、計7箇所のトレンチを設定し、一部史跡内に入る箇所については文化庁に現状変更届けを提出した。なお調査は10月初旬に着手し、12月中旬に作業を終了したが、調査全般にわたり三重大学教授・八賀晋氏に指導・助言をいただいた他、測量、遺構実測について、県教育委員会文化振興課並びに県埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。



1. 伊勢国分寺跡
2. 同尼寺跡推定地
3. 大鹿山1号墳
4. 木田城跡
5. 狐塚古墳群
6. 蛸田古墳
7. 大谷古墳
8. 山辺横穴墓
9. 南山古墳群
10. 舟塚古墳
11. 一反通遺跡
12. 乘鞍山古墳
13. 北町古墳
14. 南町古墳
15. 川原井瓦窯跡
16. 白鳥塚1号墳
17. 北野古墳
18. 加佐登古墳群
19. 津賀平遺跡
20. 高塚古墳群
21. 狐塚古墳
22. 長者屋敷遺跡

第1図 周辺遺跡位置図（1：50,000）

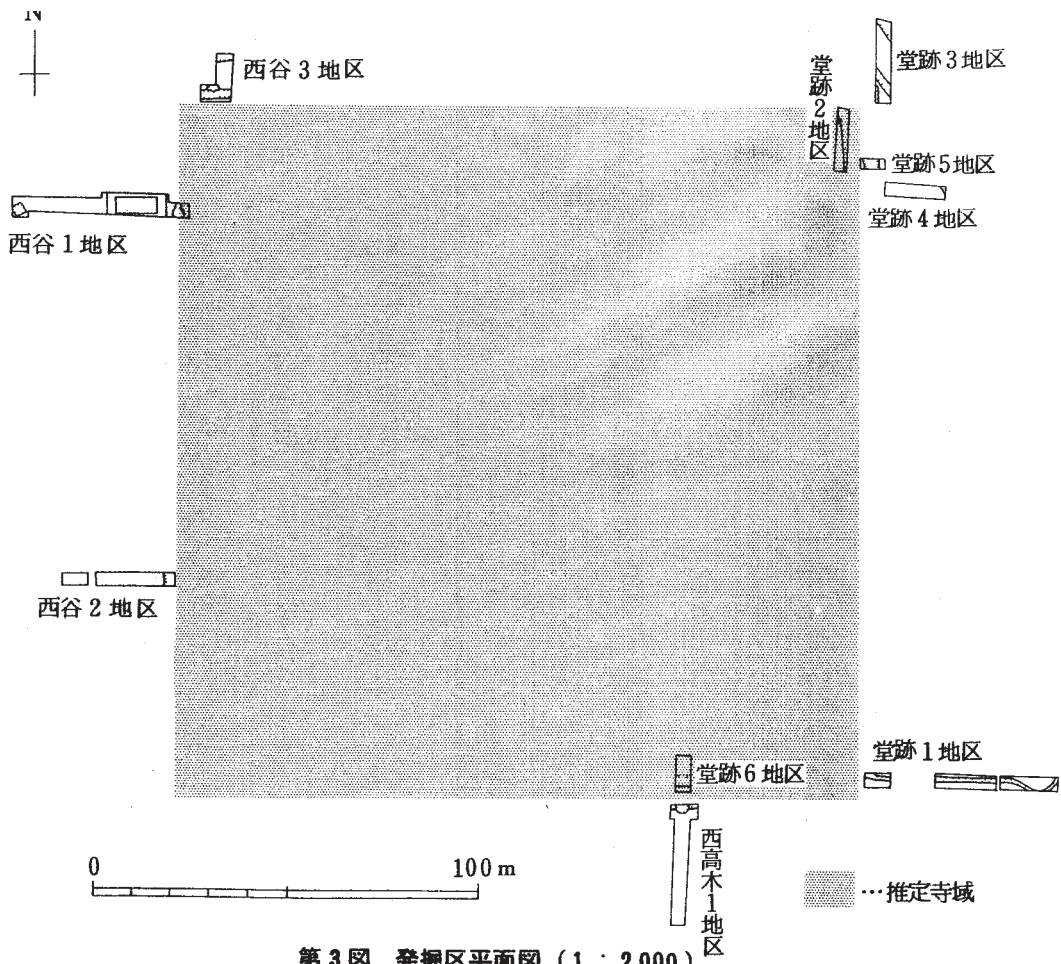


第 2 図 地形図 (1 : 2,000)

# 遺 構

西谷3地区（第4図） 史跡指定範囲の北西隅付近に約4m × 13m + 3.5m × 4.5mのトレンチを設定し、耕作土約0.05 ~ 0.1mを除去した赤褐色土地山面上面にて遺構検出を行った。その結果、発掘区南から北築地外周溝と考えられる幅約2m、深さ約0.5mの溝が検出された。溝埋土の上層においてはほぼ全面にわたって平瓦・丸瓦片が出土し、下層においては完形に近いものも目立った。溝の底近くからは瓦に混入して須恵器壺（第6図1）が出土している。その他の遺構として東西溝を切る瓦片の詰まった土壇や発掘区北側においては検出面からの深さ約0.4mの段差が検出された。

堂跡2 ~ 5地区（第4図） 史跡指定範囲の北西隅付近に約3m × 17m、4m × 22m、3.5m × 16.5m、3m × 6.5mのトレンチをそれぞれ設定し、耕作土を0.2 ~ 0.3m除去した赤褐色土地山面上面にて遺構検出を行った。堂跡2地区からは東築地内周溝と考えられる深さ約0.6mの南北溝が検出されたが、重複して掘り込まれている後世の溝のため溝内測の上端は明らかにしえない。溝埋土からは完形に近いものも含め多量の瓦片が出土した。堂跡3地区からは発掘区南西隅にて築地外周溝の北東隅と考えられる部分が検出された。溝埋土からは瓦片に混ざって須恵器瓶子など（第6図2 ~ 4）がまとまって出土した。その他、発掘区北側にて検出面からの深さ約0.2mの段差や中世以降の溝などが検出された。堂跡

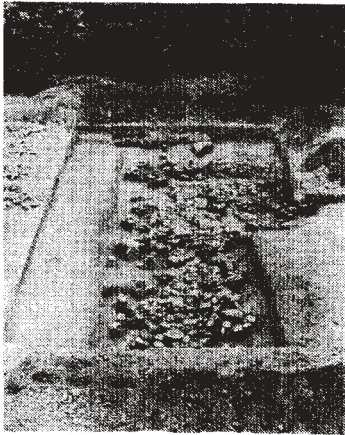


第3図 発掘区平面図 (1 : 2,000)

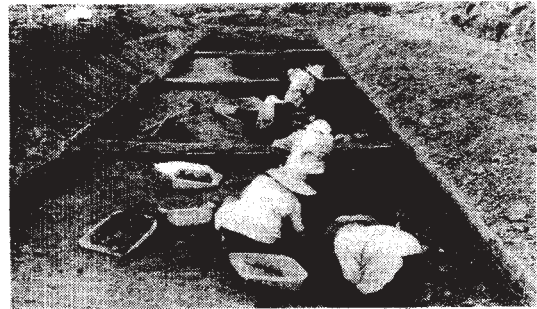


5地区からは東築地外周溝と考えられる幅約3.5m、深さ約0.6mの溝が検出され、埋土からは完形のものも含め多量の瓦が溝西よりに集中して出土した。堂跡4地区からは古代末ないし中世以降の埋没が考えられるピットや溝が検出されたが、建物のまともは捉えられなかった。

西高木1・堂跡6地区（第4図）史跡指定範囲の南境界に並行して延びる農道を挟んで約4m × 28m + 4m × 8.5m、4m × 10mのトレンチをそれぞれ設定し、耕作土を約0.2 ~ 0.5m除去した赤褐色土地山面上面にて遺構検出を行った。西高木1地区では南築地外周溝と考えられる深さ約0.1 ~ 0.5mの溝が検出され、埋土からは瓦片が出土した。その他、この溝を切る瓦片の詰まった土壌や、発掘区南側においてはピットが多数検出されている。なお、ピット群直上の耕作土中より灰釉碗（第6図5）が出土している。堂跡6地区では南築地内周溝と考えられる深さ約0.5mの溝が検出されたが、溝の幅は北半が最近の攪乱土壌により破壊されているため不明である。溝埋土からは多量の瓦が出土し、南側から落下したような状態のものもみられた。



西谷3地区（東より）



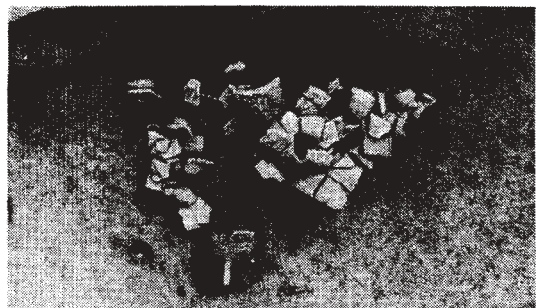
堂跡2地区（発掘風景）



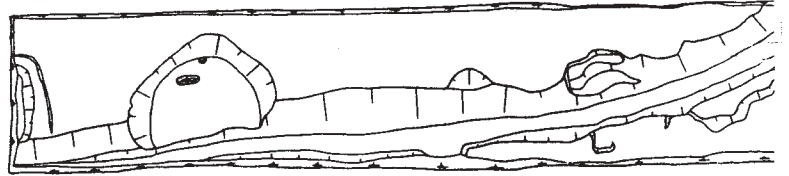
堂跡5地区（東より）



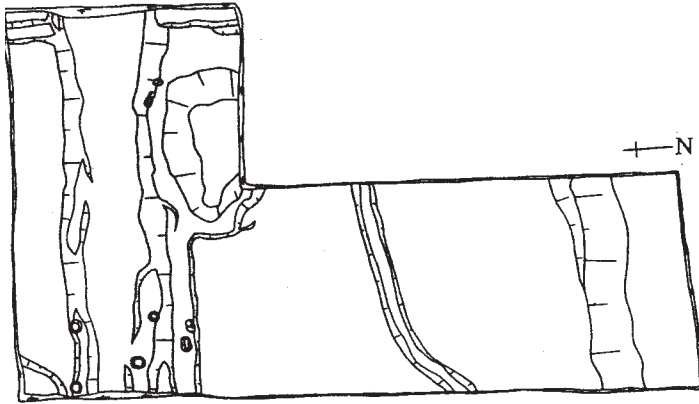
西谷3地区（東より）



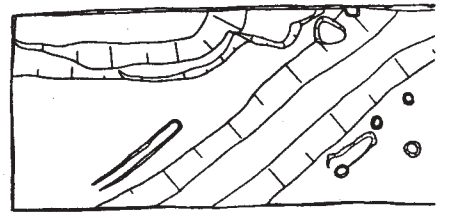
西谷3地区（瓦出土状況）



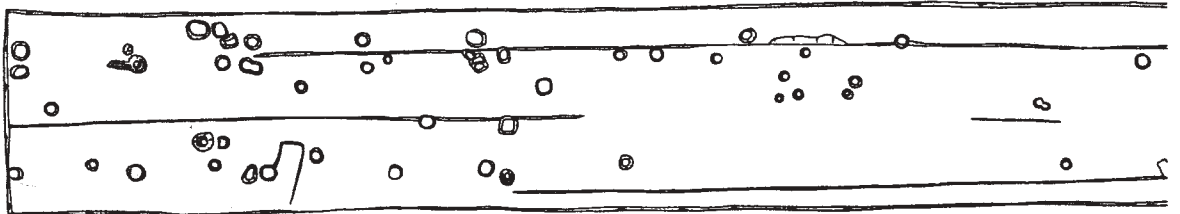
堂跡 2 地区



西谷 3 地区

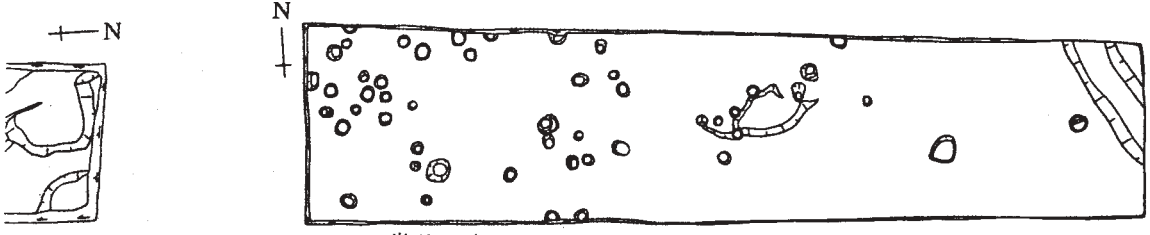


堂跡 3 地区

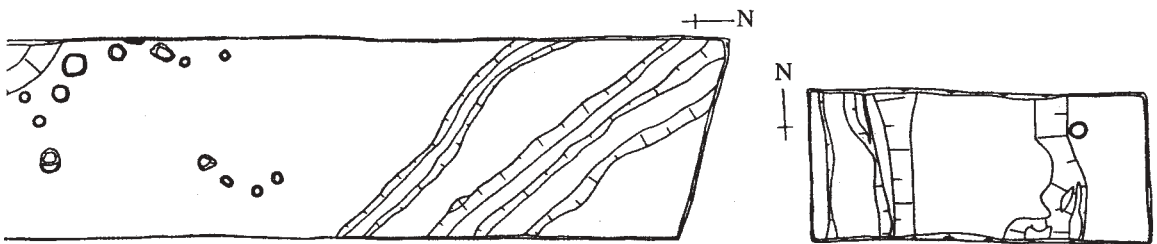


西高木 1 地区

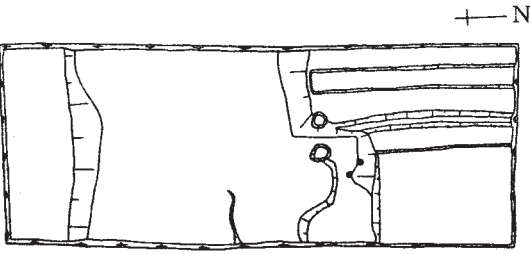
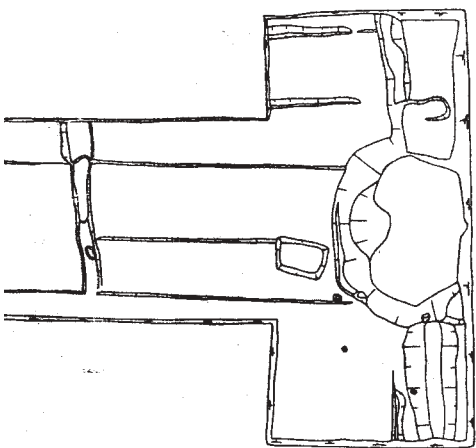
第 4 图 発掘区遺構実測図 (1 : 150)



堂跡4地区



堂跡5地区



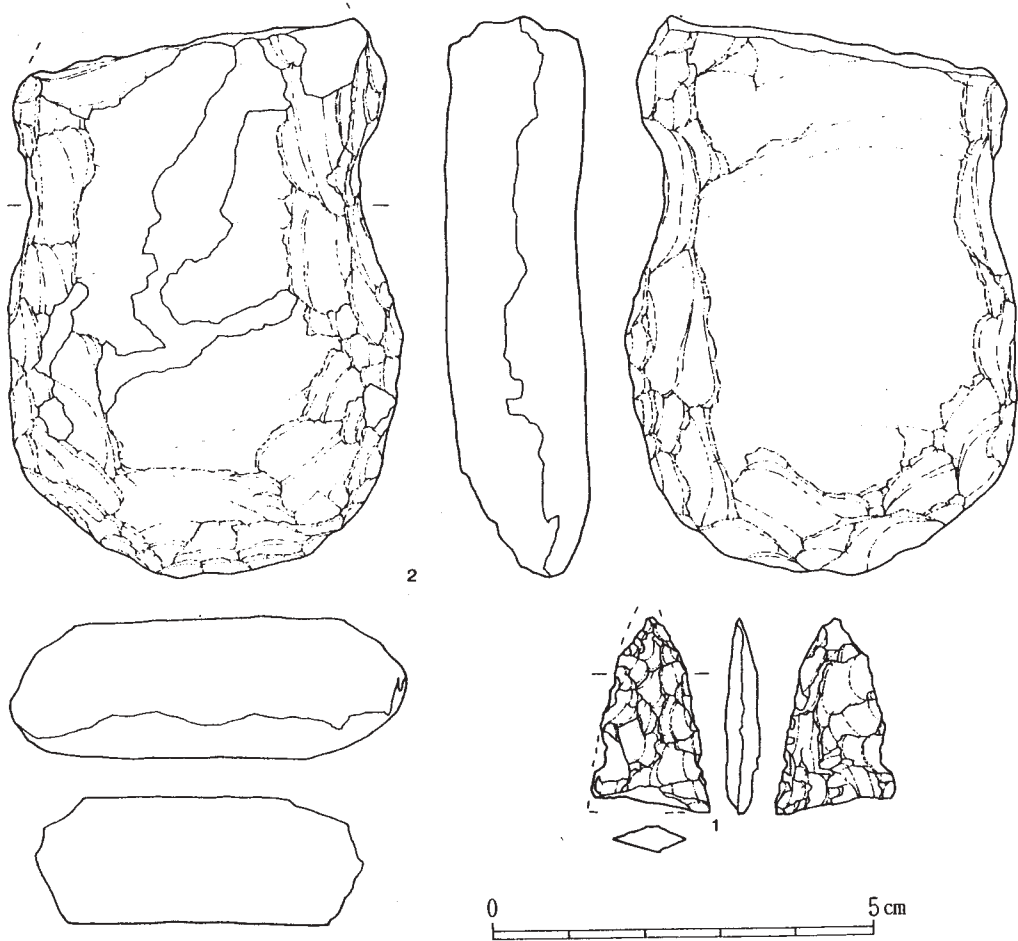
堂跡6地区



# 遺物

石器(第5図) 1は石鏃で通称土壇跡から東へ約50mの地点での表面採集資料である。先端部及び基部を欠損し、長さ2.55cm、幅1.55cm、厚さ0.47cmを測る。サヌカイト製。2は打製石斧で、堂跡2地区溝から出土した。素材は板状の礫であると考えられる。周縁に粗い調整を加えて刃部及び側縁部を作出したもので、身部中央から基部よりの両側縁に浅い挟りを有す。長さ7.48cm、幅5.09cm、厚さ1.86cmを測る。

土器(第6図) 1は須恵器壺で西谷3地区溝の底から多量の瓦に混ざって出土した。底部のみ残存する。底部外面には静止糸切り痕を残し腰部以上には回転ヘラズリが施される。高台径9.1cm。2~4は堂跡3地区溝隅から出土した。2は須恵器瓶子で口縁部及び体部約1/2を欠損する。底部は上げ底で回転糸切り痕を明瞭に留める。底部径4.7cm。3は灰釉皿で口縁部、底部とも約1/5を残す。底部から体部下半にかけて回転ヘラズリが施される。内彎ぎみの角高台を有す。体部は軽く内彎しながら口縁部に至って外反し口縁端部は丸くおさまる。内面のみ施釉される。推定口径5.6cm、推定高台径8.2cm、高さ2.4cm。4は灰釉段皿で口縁部約3/4を欠損する。内彎ぎみの角高台を有す。底部から体



第5図 石器実測図(1:1)

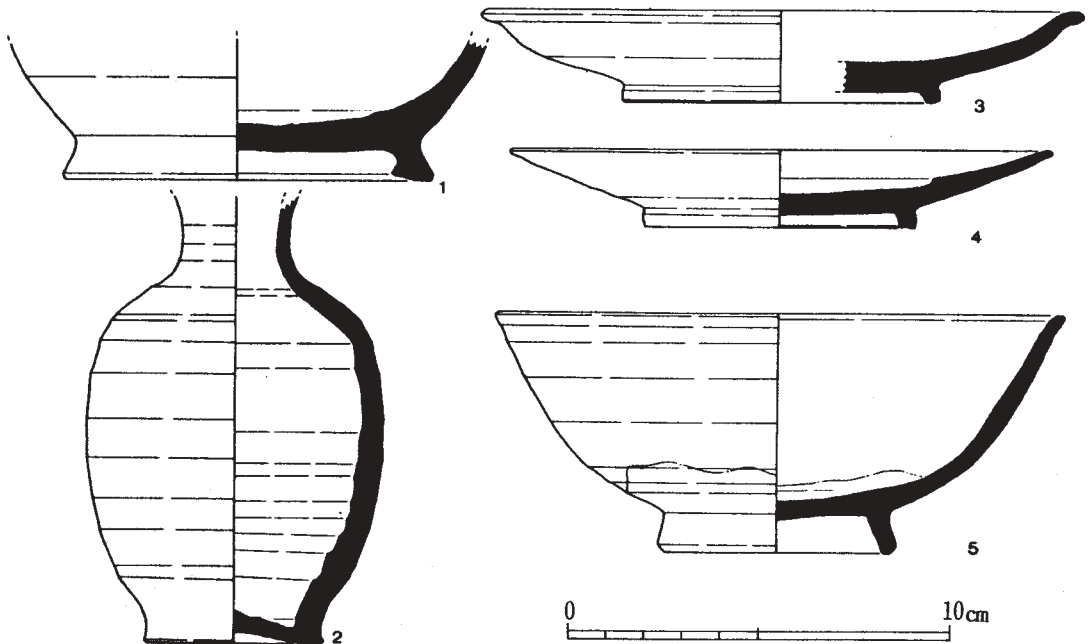


部下半にかけて回転ヘラケズリがなされる。体部から口縁部にかけては直線的に開き口縁端部は尖りぎみにおさまる。内面のみ施釉される。推定口径4.1cm、高台径6.2cm、高さ2.1cm。5は灰釉碗で西高木1地区から出土した。口縁部約1/3、底部約2/5を残す。底部から体部下半はヘラケズリされる。わずかに外反ぎみに開く高台を有す。体部は緩やかに内彎し、口縁端部は心持ち外方へ開く。上半をつけ掛け施釉される。推定口径14.8cm、推定高台径6.1cm、高さ6.4cmを測る。

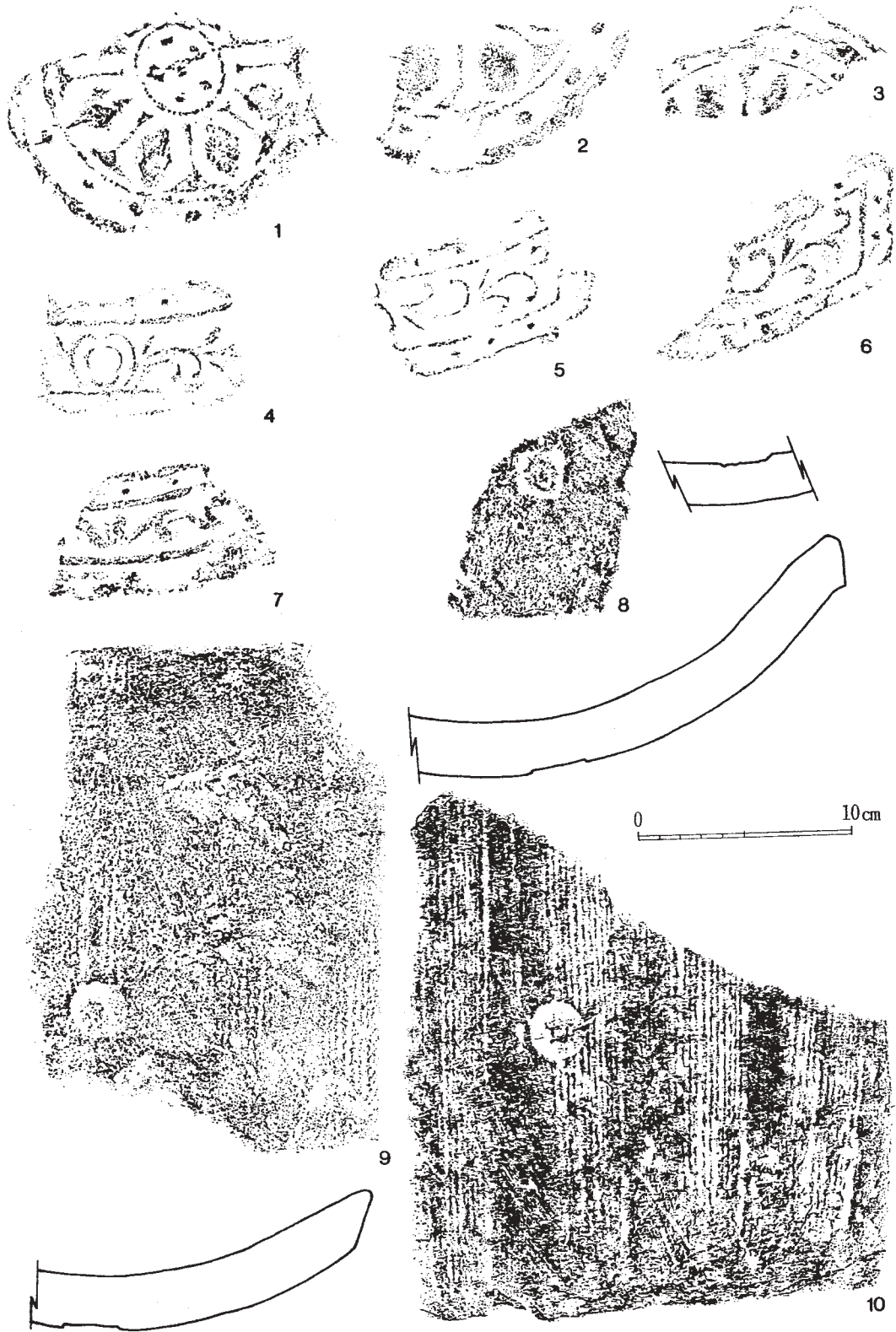
瓦（第7図）瓦は、寺域外であることが判明した堂跡4を除き、各トレンチの築地内・外周溝内及び瓦溜り土壌から多量の出土をみた。その量は、土嚢袋で約150袋に達し、ほとんどが平瓦・丸瓦で、現在ようやく整理に着手したところである。軒瓦は全体でも10点余りにとどまり、そのほとんどは推定南大門跡に近接する堂跡6・西高木1地区の瓦溜り土壌などから集中して出土している。も同様に堂跡6・西高木1地区で10点余が出土し、完形のものはないが、断面長万形と台形のいずれも煉瓦様のものである。

〔軒丸瓦〕1は中房内に1+5、外区に16の蓮子を配する素弁八葉達華文軒丸瓦で、箔割れの痕跡を明瞭にとどめるものである。2は、中房内に1+6、外区に16の蓮子を配する素弁八葉蓮華文軒丸瓦とみられる。両者とも、伊勢国分寺跡において最も普遍的にみられるタイプである。3は堂跡3地区から出土、中房内に1+6、外区に16の蓮子を配する素弁八葉蓮華文軒丸瓦であるが、外区珠文の外側に幅1cm、の陽帯を巡らせるものである。

〔軒平瓦〕いずれも、外区に珠文を巡らせ、内区には中心飾りから左右に唐草が反転しながら延びる均正唐草文が配される。4はその中央部で、二重線であらわす3弁花様の中心飾りを持ち、これも伊勢国



第6図 出土土器実測図（1：2）



第7图 出土瓦拓影 (1:3)

分寺跡で最も普遍的なタイプである。5・6も4とほぼ同型式である。7は堂跡2地区から出土、内区の幅が狭くなり唐草文も太く減り張りの無い退化型とみられる。

〔押印瓦〕調査例として今回初めて3点が確認された。8は西高木1地区から出土、薄手の平瓦の凹面中央部に押印された角印で一辺2cm、印字は明瞭でないが過去の表採例からみて「句」とみなされる。9・10は、堂跡5地区溝から出土したもので、伊勢国分寺跡で一般的な平瓦の凸面中央に丸印で直径2.6cm、印字は全く不明瞭であるが、押印瓦が多数出土している鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡出土品との対比から「上」か「工」であろうと考えられる。

## まとめ

2か年の調査により、伊勢国分寺跡の規模が東西・南北約180m(600尺)であることと、その規模が大正11年に指定された範囲と大きなずれがないことが明らかにされた。しかし、昨年度の調査でも明らかにされたように、寺域外にも国分寺関連遺跡が埋もれている可能性もあり、外側にも目を向けていく必要がある。

北勢バイパス・不燃物施設建設にともなう各種の開発も予想され、伊勢国分寺跡を取り巻く環境は決して良いとは言えない。今後、さらに地元関係者のご理解とご協力を賜るとともに文化庁・県教育委員会の指導を得ながら、保存と開発の調整に努めていきたい。



国分寺周辺航空写真